

平成 19 年度 第 2 回 全学 FD
第 1 分科会（基準 4 学生の受入）報告

司 会 （歯学）寺田善博教授
記録係 （文学）山内昭人教授

平成 19 年 9 月 11 日 14 : 10 ~ 15 : 30

最初に、出席取りを兼ねて各自自己紹介をしてもらった。

続いて、司会者が配布資料『大学機関別認証評価 自己評価書（抄）』の中の各認証評価基準を読み上げながら、各項目ごとに意見を出し合ってもらい、特段の意見集約は行わなかった。以下に記すのは、各項目ごとに出された意見である。

（1）観点ごとの分析

4 - 2 - 2

・（工学）博士課程の 3 ないし 4 割は留学生が占めており、彼らが帰国した後のフォローについては、教員の個人的フォローには限界があり、金銭的サポートも望まれているので、全学的取組を是非とも検討してもらいたい。（なお、再留学を支援する機関が実際にあり、本学に適用例があるとのことなので、それについても事務局で調査してもらいたい。）

4 - 2 - 3

・（理系）院入試の英語でミスが出たので、学府の約 3 分の 2 の専攻が TOEFL で対応することになった。

4 - 2 - 4

・後期日程の廃止は、入学者選抜研究委員会の調査を踏まえている面がなくはないが、話を聞くと外的要因も含め多様な判断が加えられており、それゆえ学部学科で個別に検討している現状は納得がいく。

4 - 3 - 1

・（理系）博士課程の充足率の低さに関連して、社会人入学で入ってきた院生の意識は必ずしも高くない。どうしてもアジアからの留学生に期待せざるをえない。

・（文学）九大文学部内からの院への進学率が低すぎる問題がある。

・（経済）学部卒業生の方が希望の企業に就職しやすく、大学院生は不利となっている（ビジネススクールは社会人入学が大半なので、問題外）。

・（理系）修士課程の学科によって充足率のバラツキがあるので、入学定員数の総枠だけを決めておいて、各学科の入学者数は融通をきかせることにしている。

・（数理）博士課程の入学定員を修士課程に移すことを、来年度から実施する予定。

・（数理）博士課程で昨年度は社会人入学を 2 回までやって入学定員数を埋めた。

（2）優れた点及び改善を要する点

組織改編に連動した入学定員の見直し

・医学部では学科間の入学定員の移動も含めた改革を実施した。学部教育を見直して、魅力ある医学生を養成したい。将来的には、学部間の入学定員のやり取りを含めた改革をしないと立ちゆかなくなるのではないかと思っている。

第2分科会のまとめ

1) 学部教育のシラバスについて、

シラバスについては、文学部を除いた各学部で作成されていることは確認できた。文学部では講座性が強くシラバスに対する認識が低いとの発表があった。ただし、各学部においては、その形式についてはさまざまでかなりの温度差があることが明確になった。進んでいる学部では、すでに Web-CT を利用してシラバスを公開し、教科によっては講義の資料を upload している。逆に、冊子を作成して配布している学部も存在していた。ただし Web 公開では update の頻度が悪い部局もあり、Web 等の取り扱いが苦手な年配の教員に対して、若手教員への負担も高いことが発表された。

全体としては、シラバスへの認識が低く、全学で統一したシラバスへの認識アップが必要である。特に工学、農学等では、コース分属に重要なので、十分利用しているとの意見も出た。

2) 評価基準について、

GPA に代表される評価基準については、各部局で温度差が非常に大きいと感じられる。どのように利用できるかに関しては、全体としてわかっていないとの感じである。相対評価が採用できるものだけではないとの意見も多かった。工学部では、複数の教員で一つの教科を教育しているところがあり、この様な教科では相対評価は十分行われている。医学部等では、学習困難者を早期に発見し、そのケアに使っているとの発表があった。この意見は参考になるとの反応があった。農学部等では成績優秀者の評価に使われているとの発表があった。評価基準の統一に関しては、もっと全体へのコンセンサスを得ることが必要である。特に各部局での FD がもっと必要である。特に文系についてその傾向が強かったと思われる。

3) 単位の互換性について、

単位互換性についても時間が少なかったが、皆様の状況を検討した。留学生センターでは、すでに日本の単位と外国の単位の互換を行っているとの状況が紹介された。芸術工学部では留学生交換を鋭意行っている。また農学部では現在ダブルディグリーの取得を検討している。医学部でも外国（東南アジア、中国、韓国）からの問い合わせがあるとのことが紹介された。

4) その他

時間が足りなくてその他の事項については検討できなかった。

平成19年度第2回全学FD

第3分科会 基準5 教育内容及び方法（大学院課程）（於207教室）

報告書

司会：（総理工）松永・書記（経済）藤井

（1）単位の実質化・成績評価について

- 多くの学府の修士課程では、学生の専攻以外の科目を卒業単位として履修する際、評価はレポートで行っている。ただし、試験を行うという例も少数見受けられた。
- 修士課程では、文理融合の学府あるいは選択科目の多い学府などでは、教員個人や科目間の難易度にばらつきが生じやすいという問題を抱えている。
- 大学院課程全般で、単位の実質化を確定できる勉強時間確保の証明は現実的に困難ではないか、との意見があった。
- 博士課程のもつ専門家要請という観点からすると、単位の実質化あるいは定量的な成績評価ということ自体に意味はない、との意見が出た。
- 九大全体として、共通あるいは統一的な単位の実質化、成績評価は困難ではないか、との意見もあった。

（2）研究指導について

- 学府全体をあげての組織的指導システムというのは、いずれの学府にも存在しない状況であった。
- いくつかの学府では、修士課程について主に第2学年で教室や講座単位での専攻報告会のようなものを開催しているという報告があった。
- 大学院での指導が順調でない場合のバックアップシステムをどのようにしたらよいのか、という意見が出された。
- 集団指導体制がそれなりに機能しているという学府の例も紹介された。

(3) シラバスについて

- シラバスの有用性という観点で、大学院課程についてはとりわけそれが限定的にならざるを得ない、という意見があった。
- 博士課程については、シラバスでの定量的な説明や記述は無意味ではないか、という意見がいくつか出された。
- 大学全体として統一的なシラバスを策定するということは、他面で特色ある教育や授業の良さを必ずしも確保できないのではないかと、という意見が出された。

以 上

第2回全学FD 分科会4：教育の成果(学士課程)討議メモ

司会：古川明德(工学研究院)、記録：一宮 厚(健康科学センター)

1. 学生の学力の程度について：

大学院への進学という点から見た学力レベルに関する発言は次の通りであった。

- (工学) 機械：大学院修士課程修了の段階で昔の学部卒の水準くらいではないか、学士のレベルは低下している。
- (農学) 学生のレベルは様々で、大学院への進学においては意欲の方が大切である。
- (法学) 法科大学院への志願者が減っている。研究者志向が低下している。
- (薬学) 7～8割が院に進学する。学力レベルは上がっている。
- (理学) 大学院終了後の就職の斡旋先が少ないという問題がある。
- (経済) ビジネススクール：博士課程は少ない、社会人学生が主。
- (工学) 地環：修士進学希望は多い。課程での講義に付いて来れるかで判定しているが、低下はしていない。博士は充足できず社会人で補充している。
- (工学) エネルギー：数学・物理の力が落ちている。難しさへのチャレンジ精神が弱くなっている。
- (文学) 修士課程も充足率が低い。一方、博士課程には割に進学する。進学者は研究志向。
- (経済) 就職は景気の影響を受ける。修士以上では、就職しにくくなるという問題がある。
- (工学) 航空宇宙：9割が修士に進学する。就職に圧倒的に有利なため、研究志向は少ない。
- (言文) 留学生が多い。学際的で専門性は高くない
- (教育) 学生は優秀で、心理臨床への進学希望は強い。
- (芸工) 半分は修士に進学(実践的で、就職に有利)。学力レベルは、成績は良くなっているが、発想力(独創性)に乏しい印象。
- (農学) 院試は資格試験的である。博士への進学は少ない。
- (シ情) 院試受験者数が減っている。就職希望者が増えている。他大学院に進む者もいる。学部生の成績は低下している。
- (理学) 学力は低下している。学力のある学生はよりレベルの高い大学に行く。
- (歯学) 国試が基準、CBTの基準を高くしてレベルを維持している。院への進学は多くない。
- (シ情) 学力は低下している。実験がネックとなって留年が増えていた。反応の乏しい学生も増えている。修士は充足するが、博士の充足が悪くレベルが低下している。
- (医学) 臨床志向が強まる状況にあって、基礎研究者の養成が出来ていない。そこで休学して基礎研究に進む道をつくった。
- (工学) 物質科学：殆どが修士に進学。院試の科目を変えたら学力が低下したので、必須を変えた。

まとめ 大学院重点化大学として、大学院修士課程への進学レベルの観点から学部教育の成果を総括すると、文系・医歯薬系・理工系に大別して、つぎのように纏めるこ

とができる。

- (1) 文系は、学部卒での就職が多い。大学院への進学は景気の影響が大きい。学力レベルの低下は認められない。大学院修士課程へは研究者志向の者が進学し、博士課程への進学と一体である。
 - (2) 医歯薬系は、学部卒後に国家試験があり、レベルは維持できている。
 - (3) 理工系は、修士までで学卒のレベルを維持しているところがある。修士が就職に有利な状況。理系の基礎力が落ちているため、その補講を行っている学科もある。
- いづれにおいても研究志向の学生は多くない状況、研究者の就職先を広げることが求められている。

2. 社会・企業の評価について

企業へのアンケートは部局によってこれから実施しようとしている段階である。アンケートの実施に当たって、感じたことについて次の意見があった。

- (1) 九大出身者が多いが会社でなければ情報が得られないだろう。
- (2) 問い合わせても回答しない会社もある。
- (3) 九大の評価が低く、採用数を減らした企業もあるという話を聞いた。

3. 学生からの評価について

学士得の授業アンケートの集計結果については、ほとんどの部局が、教員へのフィードバックを行っている。これに関して出された意見は次の通りである。

- (1) 学生の評価の高い教員による模範講義をしている。
- (2) 教員個人に結果を返している。
- (3) 評価アンケートにおいて、学生の意見に極端なものもある。適切な評価の指導も教育という点から重要
- (4) 教員、個々人が頑張っていればよく、それが全体の評価につながる。
- (5) 学生が教員個人ではなく、大学での教育全体に関する評価をさせていないのではないだろうか？

2007年9月13日

第2回全学FD 第5分科会 討議報告書(案)

司会 理学研究院 教授 横山拓史

記録 芸術工学研究院 教授 都甲康

至

1. テーマ 大学院教育の成果(基準6)
2. 日時 平成19年9月11日 14:10~15:40
3. 場所 箱崎文系地区 講義棟3階 304教室
4. 出席者 24名
5. 討議概要

大学院教育の成果をどのように図るかというテーマについて、まず出席者の現状認識の共有を図るため、認証評価『自己報告書』の内容を冒頭確認した。その後、自己紹介を兼ねて各部局の取り組みについて報告ならびに自由な意見交換を行い、その結果、次のような現状や課題、特徴等があることが明らかになった。

1) 授業評価について

- 大学院においては授業の受講者数が少ない場合があり、場合によっては教員と生徒が1:1になりアンケートそのものがなりたないケースがある。
- ある部局では、育成する人材像・就職先も同じ業界(船舶等)で、このような場合は教育の成果も図りやすいと思われるが、大半の部局では多様な研究をおこなっており就職先も多様であるため、ポリシーや成果をどこにおくかという基準の設定そのものが専攻毎に異なるため(専攻も多い)、全体として一律の成果を図るのは難しい。
- 成績の分布を成果指標として活用してはどうかという意見があった。
- 学生の成果を記録するためポートフォリオを導入し、定期的に教員・生徒双方で成果を検証する方法を採用しているという部局があった。
- 修士論文提出後にアンケートを実施することにより、生徒からは辛らつで本音の意見が聞けるといった部局があった。

2) 就職先アンケートについて

- 就職先の企業にアンケートを実施している部局が3~4あったが、企業担当者からアンケートの回答について個人を特定することになりプライバシーの観点から断られるケースがあるとの報告があった。
- 部局が独自で行ったアンケートと本部が行ったアンケートが重複して送られた企業があり、今後連携をして欲しい旨の意見があった。

3) その他特徴的な意見について

- 60歳までの卒業生に対して「教育に関するアンケート」を実施し(回収率30%)、社会人として重要と思われることを聞き、カリキュラムの検討資料

として活用している部局があった。

- 卒業生や社会人による講演会やセミナーを定期的を開催し、社会での評価をヒアリングしている部局があった。
- 卒業生とのネットワークを重視し、地域におけるリサーチワークショップを毎月開催している部局や、東京にサテライトを設け社会人や卒業生による公開講座やセミナーを開催し社会での評価情報を収集している部局もあった。
- 定量評価がよくわからない、第三者機関に評価を委ねなければ、学内だけでは難しいのではないかという意見があった。
- 今年度学府の再編を行った部局や、学位取得の条件や臨床試験の検討等成果について制度的に取り組んでいる部局があった。

以上

第6分科会 基準9 教育の質の向上及び改善のためのシステム

一、学生の意見聴取

1. 全部局で授業評価が実施されている。特に工夫が見られる

例としては：

- 授業評価の設問を教員が独自に追加できる形式をとっている。回収箱に学生が自分で提出する方法では回収率が30%程度だったので、授業中に事務で回収する方法にして回収率を80%程度に上げることが出来た。当該学期に評価を授業に反映させることができるよう、学期の途中で授業評価を実施している。
 - 全学教育では、学生が自分で回収箱に提出する方式になっているが、回収率が一般に悪い、それで記入時間終了後学生代表にその場で集めてもらい学生代表に一括して回収箱の入れてもらう。
 - 講義時間に授業評価を記入させ、その場に回収箱を用意して提出してもらう。
 - ITで授業評価を提出する方法をはじめた、回収率についてはまだ不明。
 - 授業評価結果が、講義担当者以外の教員にも公表されている部局もあった。
2. 深刻なクレームに対応するために、記名で部局長へ投書することができるシステムや、就学指導教員制度でそれらの相談に対応しているとの報告があった。
3. 学生が真面目に回答していない授業評価書も多く見られ、設問を工夫する等授業評価に専門的にかかわっている方に全学FDなどの場で講演して貰いこの点の改善を諮るのも必要。

二、学外関係者からの意見聴取

- 卒業生の直属の上司に卒業生の評価をお願いした。上司が個人評価を書くのは困難があり、この方法は大変不評であった。
- 集中講義の講師(民間人も含む)により、受講生の評価を実施している部局もあった。

三、評価結果のフィードバック

- 授業評価で見つかった問題点(例えば、レポート課題提出の頻度が多すぎる等)を部局FDで取り上げ改善策について部局FDの場で議論しているとの報告もあった。
- 教員が自分自身の授業評価について報告書を作成し提出しなければならない部局もあった。
- 学生が良い授業を推薦する制度があり、表彰制度を導入している部局もある。

四、その他

- 同規模の八大学で協力し「専門力」「人間力」について、ITで解答してもらい学生のレベルを他大学と比較しているとの報告があった。
- 学生に不足していると思われる「国際力」を養うために、海外インターンシップや留学生による自国文化の紹介を演習の時間を用いて実施しているとの報告もあった。